

2. 調査結果の概要

1. 保護者票の調査結果について

(1) 保護者の状況について

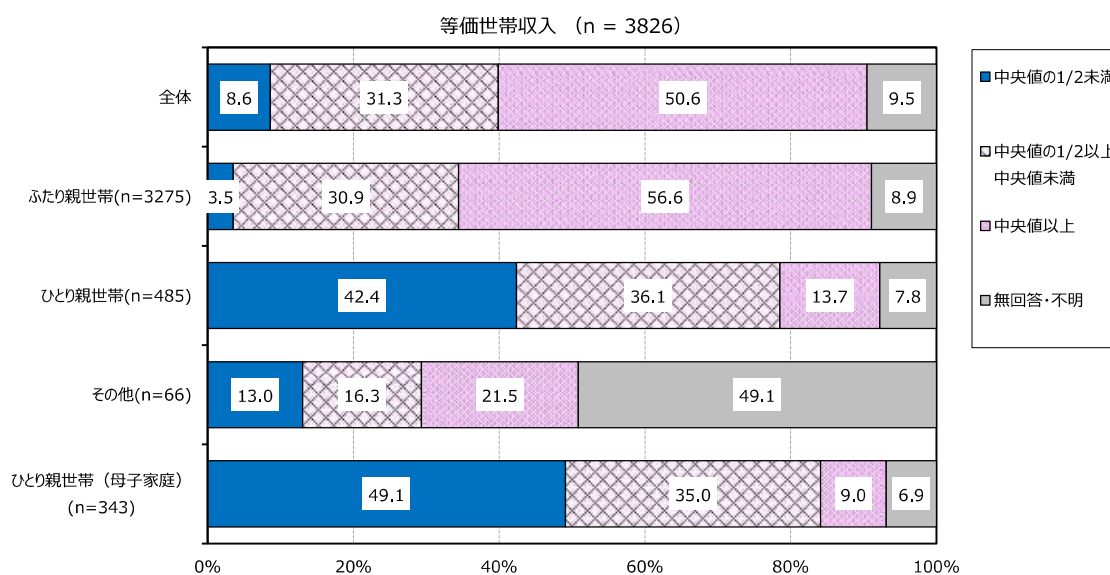
○子どもの親の婚姻状況については、「結婚している（再婚や事実婚を含む。）」が85.6%、「離婚」が10.9%、「死別」が0.9%、「未婚」が0.8%となっていました。このうち、「離婚」、「死別」、「未婚」を合わせた値を「ひとり親世帯」とし、この割合は**12.7%**となりました。

○世帯全員の年間収入（税込）については、全体では「500～600万円未満」が13.1%で最も割合が多くなりました。

○得られた年間収入の結果を基に等価世帯収入を算出した結果、等価世帯収入の中央値は2,750,000円、中央値の1/2の値は1,375,000円となりました。この金額を基に「中央値の1/2未満」、「中央値の1/2以上中央値未満」、「中央値以上」の3つの区分に分け、各設問において分析を行っています。

○世帯の状況別に等価世帯収入の分類を行った所、「中央値の1/2未満」の割合は、「ひとり親世帯」で42.4%となっていました。さらに「中央値未満」の割合は「ひとり親世帯」で**78.5%**となっていました。（下図参照）

「ひとり親世帯」のうち、母子家庭では「中央値の1/2未満」の割合は、49.1%、「中央値未満」の割合は84.1%となっており、「ふたり親世帯」よりも「ひとり親世帯」、「ひとり親世帯」の中でも特に母子家庭で生活が苦しい状況が見受けられました。



- 現在の暮らしの状況では、「苦しい」と「大変苦しい」を合わせた割合が全体では27.1%、小学5年生では27.4%、中学2年生では26.8%となりました。
- 等価世帯収入で分類した結果では、「中央値以上」と「中央値の1/2未満」では約3.8倍の差となり、世帯の状況別の結果では、「ひとり親世帯」と「ふたり親世帯」で「苦しい」と「大変苦しい」を合わせた割合に約2倍の差がみられ、「ひとり親世帯」の生活が「ふたり親世帯」に比べ、苦しい状況にあることがわかりました。
- 過去1年間に食料が買えなかった経験は、「中央値の1/2未満」では「よくあった」から「まれにあった」までの合計の割合が46.0%となっており、この区分の2人に1人が食料を買えなかった経験をしていました。
- 過去1年間に衣服が買えなかった経験については、等価世帯収入別では、「よくあった」から「まれにあった」までを合わせた割合は「中央値の1/2未満」で53.5%となっていました。また、世帯の状況別では「よくあった」から「まれにあった」までの合計の割合は「ひとり親世帯」では39.7%、「ひとり親世帯（母子家庭）」では40.2%となっていました。
- 過去1年間に「電気料金」、「ガス料金」、「水道料金」を経済的な理由で払えなかった世帯の割合は、「中央値の1/2未満」でどの料金においても9.5%以上でした。
- 子どもの親の就労状況については、母親において、「ひとり親世帯」で「正社員・正規職員・会社役員」の割合が46.2%と、「ふたり親世帯」に比べ、大幅に多くなっていました。「ひとり親世帯」の母子家庭では「正社員・正規職員・会社役員」の割合は51.9%と、50%を超えていました。
- 子どもが0～2歳の時に通っていた教育・保育施設等については、「ひとり親世帯」では、「認可保育所・認定こども園」が57.2%と最も多く、続いて「もっぱら親・親族が面倒を見ていた」が32.8%で多い結果となりました。「ふたり親世帯」では、「認可保育所・認定こども園」が39.9%、「もっぱら親・親族が面倒を見ていた」が50.9%となっており、「ひとり親世帯」と逆の結果となる傾向がみられました。
- 子どもとの関わり方においては、どの質問においても等価世帯収入が高くなるほど、「あてはまる」と「どちらかといえば、あてはまる」の合計の割合が多くなりました。また、「ひとり親世帯」よりも「ふたり親世帯」の方が「あてはまる」と「どちらかといえば、あてはまる」の合計の割合が多くなりました。

○生活の満足度については、等価世帯収入が上がるに連れて、満足度も上がる結果となりました。また、「4点以下」は「ひとり親世帯」では34.6%、「ふたり親世帯」では17.8%となっており、「ひとり親世帯」と「ふたり親世帯」で約2倍の差がみられました。

○頼れる人の有無については、どの質問においても等価世帯収入が下がるに従い、「頼れる人がいる」の割合が少なくなり、「ひとり親世帯」よりも「ふたり親世帯」の方が「頼れる人がいる」の割合が多くなっていました。収入が少ない世帯や「ひとり親世帯」の方が周りに相談やお願いをしにくい状況にあると想定されます。

○保護者の心理的な状態については、等価世帯収入が下がるほど、スコアが高くなり、ストレスが多い状況にある傾向がみられました。また、「ふたり親世帯」よりも「ひとり親世帯」のスコアが高くなる結果となりました。

(2) 教育について

○子どもの進学への期待、展望においては、等価世帯収入が増えるに連れて、「大学まで」の割合が増加し、「高校まで」の割合が減少する傾向がみられました。また、「ひとり親世帯」では「大学まで」が20.8%、「専門学校まで」が20.2%、「高校まで」が34.9%となっており、「ふたり親世帯」に比べて、進学への希望が低い傾向がみられました。

○進学の段階の希望・展望の理由については、等価世帯収入別の「中央値 1/2 未満」、世帯の状況別の「ひとり親家庭」（母子家庭も含む）においては、理由として「家庭の経済的な状況を考えて」が15%以上と、経済的な影響がみられました。

(3) 支援制度について

○保護者の支援制度の利用状況については、等価世帯収入の「中央値未満」（「中央値の1/2 未満」と「中央値の1/2 以上中央値未満」）と世帯の状況の「ひとり親世帯」において、「就学援助」、「児童扶養手当」で「現在利用している」の割合があり、世帯の一助になっていると考えられます。

○支援制度を利用しない理由としては、等価世帯収入の「中央値未満」（「中央値の1/2 未満」と「中央値の1/2 以上中央値未満」）と世帯の状況の「ひとり親世帯」において「制度の対象外だと思っから」の割合が高く、対象となる条件の案内の強化が必要と考えられます。

2. 子ども票の調査結果について

(1) 子どもの状況について

- ふだんの学校の授業以外の1日あたりの勉強時間については、等価世帯収入が増えるに従い、「1時間以上」の割合が増加しました。また、「ふたり親世帯」に比べ、「ひとり親世帯」では「まったくしない」「30分より少ない」の割合が多い結果となりました。
- クラスの中の成績については、「やや下のほう」と「下のほう」を合わせた割合が、世帯収入が下がるに連れて、増加する傾向となりました。また、「ふたり親世帯」よりも「ひとり親世帯」の方が「やや下のほう」と「下のほう」を合わせた割合が多くなる結果となりました。
- また、授業の理解度においても、等価世帯収入が少なくなるに従い、「いつもわかる」と「だいたいわかる」を合わせた割合も減少しました。また、「ひとり親世帯」においても、「いつもわかる」と「だいたいわかる」を合わせた割合が「ふたり親世帯」より少なくなりました。

- 部活動等の参加状況については等価世帯年収が下がるに連れて、「参加している」の割合も減少しました。「ふたり親世帯」の「参加している」の割合が「ひとり親世帯」よりも多い結果となりました
- 部活動等に参加していない理由では、等価世帯収入別の「中央値の1/2未満」において、「費用がかかるから」、「家の事情があるから」が他の収入の層よりも多い割合となっており、家庭の経済的な状況や介護などの家庭の事情による影響が想定されます。

- ふだんの朝食の状況においては、等価世帯収入が少なくなるに従い、食事の頻度が減少する傾向がみられました。また、「毎日食べる」の割合は「ひとり親世帯」よりも「ふたり親世帯」で多くなりました。
- 就寝時間については、等価世帯収入が少なくなるに従い、ほぼ同じ時間に寝ているということに対して「そうである」「どちらかといえばそうである」を合わせた割合が減少する傾向がみられました。また、同割合は「ひとり親世帯」よりも「ふたり親世帯」で多くなりました。

- 相談できると思う相手については、等価世帯年収の「中央値の1/2未満」、世帯の状況の「ひとり親世帯」において、「祖父母など」、「ネットで知り合った人」、「誰にも相談できない、相談したくない」が他の層に比べて多い結果となりました。「誰にも相談できない、相談したくない」に関しては、そのような問題を解決することが必要になると考えられます。

○生活の満足度においては最近の生活、学校生活、家庭生活のどれにおいても、等価世帯収入が上がると満足度も高くなり、「ひとり親世帯」よりも「ふたり親世帯」で満足度が高くなる結果となりました。

○子どもの心理的な状態については、「情緒の問題」、「仲間関係の問題」において、等価世帯収入が上がると問題性が低くなり、「ひとり親世帯」よりも「ふたり親世帯」で問題性が低くなる結果となりました。

(2) 進学について

○子どもの将来の進学の希望については、等価世帯収入が増えるに連れて、「大学まで」が増え、「高校まで」が減少しており、保護者の進学段階の希望・展望と一致した動きとなっていました。また、「ひとり親世帯」と「ふたり親世帯」を比較すると、「高校、専門学校」までの割合（「中学」「中学、高校」「中学、高校、専門学校」を合わせた割合）が「ひとり親世帯」で多くなりました。

○進学希望の理由については、等価世帯収入の「中央値の1/2未満」、世帯の状況の「ひとり親世帯」において、「家にお金がないと思うから」、「早く働く必要があるから」の項目での割合が他の層に比べ、多い結果となり、保護者の理由と同様に、家庭の経済的な状況が子どもの進学希望にも影響を与えていると想定されます。

(3) 支援制度の利用について

○支援制度・居場所を利用したことによる変化として、等価世帯収入別では、多くの項目で「中央値の1/2未満」の割合が他の収入の層よりも多く、支援制度が大きな支援になっていると想定されます。

また、世帯の状況別においても、多くの項目で「ひとり親世帯」もしくは「ひとり親世帯（母子家庭）」の割合が「ふたり親世帯」よりも多く、「ひとり親世帯」の助けにもなっていると考えられます。